

夜のパサージュ

——ヴァルター・ベンヤミンと『白痴』——

Passage der Nacht. Walter Benjamin und »Der Idiot«

岩 本 剛

要 旨

ヴァルター・ベンヤミンの小論「ドストエフスキーの『白痴』」(1917年)は、小説『白痴』に対するベンヤミンの並々ならぬ偏愛を如実に物語る特異なテキストである。主人公ムィシキン公爵の姿には、青年期ベンヤミンの親友で夭折した詩人フリッツ・ハインレの姿が二重写しにして読みこまれるが、そこにはゲルショム・ショーレムに由来する定説的解釈にいわれるような、単なるムィシキン／ハインレへのオマージュとしては把握しきれない潜在的内容が含まれている。子どもの精神からの人間性の再生を待望した青年運動とその挫折の必然性を客観的反省のなかで再構成する批評は、ベンヤミンにおいて青年運動期の過去からの訣別という通過の経験(「通過儀礼」)の契機となった。裁断する力をもつ批評の概念は、スイス時代のベンヤミンの集大成である学位請求論文『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』(1919年)に結実する。

キーワード

ベンヤミン, ドストエフスキー, 『白痴』, 批評, パサージュ

僕らは夜の只中にいる。[……] 夜に抗して戦う者は、その最も深い暗闇をも動かし、夜にさえ光をもたらさなければならない¹⁾。

1

ズーアカムプ社版ベンヤミン全集第Ⅶ巻には、およそ四半世紀にわたっ

てベンヤミンがこまめに書き留めた「読書目録」(Ⅶ /1, 437-476)²⁾が収録されている。本格的な哲学・思想書, ヨーロッパの名立たる作家たちの作品群のなかに, 中国やヴェトナムの文学作品の翻訳, 通俗的な推理小説などが折に触れて入り混じる「読書目録」は, 自他共にみとめる無類の読書家にして, その生涯を通じて情熱的な書籍蒐集家でありつづけた人のそれにかにも似つかわしい。それは, 系統的な読書とはおよそ懸け離れた, しかし, それゆえにいっそう波乱に富んだ起伏と奥行きをともなって, 異種混濁的な知の経験を媒介する〈読むこと〉の存在を示す興味深い一例であり, ベンヤミンの〈読む人〉^{オム・ド・レトル}としての自己形成を探る上で貴重な資料といえよう。惜しむらくは, この「読書目録」の一部が欠落していることである。

大学入学資格試験終了後(1912年)に開始され, 亡命途上の自死(1940年)の直前まで記帳がつづけられた「読書目録」のうち, 現存しているのは, Nr. 462以降の部分である。Nr. 462が記帳されたのは, 手紙の記述との照合から, 1916年末ないし1917年初頭と推測されている(Ⅶ /2, 724)。したがって, 欠落している Nr. 1~Nr. 461の部分には, 1912年~1916/1917年の期間の読書経験が記録されていたことになる。1912年~1916/1917年, それは青年ベンヤミンに深刻な挫折の経験を刻印した期間でもある。

学校改革論者グスタフ・ヴィネケンに感化され, ヴィネケン・サークルの最も忠実かつ有能なエージェントとして青年運動に参加したベンヤミンは, やがて第一次世界大戦の勃発を境に, 反戦を放棄した師父ヴィネケンの態度, そして偏狭なナショナリズムに傾斜した青年運動の帰趨に幻滅し, 青年運動の実践から退くことになった。ところで, 青年運動の情熱と挫折に翻弄された青年期のベンヤミンに並々ならぬ感銘を与え, 失われた「読書目録」(Nr. 1~Nr. 461)のなかにもしかと記帳されていたに違いない

一篇の小説が存在する。ドストエフスキー五大長編のひとつ『白痴』(1868年)がそれである。

青年期から晩年に至るまで、ベンヤミンがロシア(ソヴィエト・ロシア)の社会的動向とロシア文学への持続的な関心を保持していたことはよく知られている。同時代のロシア作家の作品を手がかりにソヴィエト・ロシアの社会的徴候を観察した書評群、実際のモスクワ旅行のなかで書き綴られた「モスクワ日記」(1926/1927年)、ニコライ・レスコフに取材した長編エッセイ「物語作者」(1936年)等々、ベンヤミンとロシア(文学)との深い関わりを示す事例には事欠かない³⁾。とはいえ、いま列挙した事例が、程度の差こそあれ、職業批評家としての知的関心の産物であったのに対し——ただし、アーシャ・ラツィスとの恋愛関係をめぐる葛藤を背景にもつ「モスクワ日記」は、いささか趣を異にするが——、ベンヤミンと『白痴』の関係は、そうした知的関心とは別の次元に起因しているように思われる。

1917年夏、ベンヤミンは「ドストエフスキーの『白痴』(»Der Idiot« von Dostojewskij)」(II /1, 237-241)と題された短い文章を書いた(以下、『白痴』覚書と略記する)。それから15年余りの歳月が経過したのち、おそらくはレオ・レーヴェンタールのドストエフスキー論「戦前のドイツにおけるドストエフスキー解釈」(1934年)に触発され、再度『白痴』論の構想が練られていたことは興味深い。もっとも、残された構想メモを見るかぎり、実際には書かれずに終わった二度目の『白痴』論が、全集版編集者の指摘するとおり、1917年の『白痴』覚書の根本的意図を受け継ぐ続編となる予定であったかは、にわかに判断しがたいところだ。だが、それはさておき、ここでむしろ注目したいのは、『白痴』という一つの作品に対するベンヤミンの関心のかくも長きにわたる持続の事実である。実際、ゲーテの『親和力』、あるいはヘルダーリンの詩篇「詩人の勇氣」／「憶心」を除けば、個別の一作品にベンヤミンがこれほどまでの偏愛的な関心を寄せたことは

ほかになかったといってよいのではないか。

はたしてベンヤミンは、『白痴』という作品のうちを何を読んだのだろうか。青年運動の挫折の経験と親友フリードリヒ（フリッツ）・ハインレの死、というのが、この問いに対するひとまずの答えである。ショーレムの証言に基づくこの解釈は、ベンヤミン本人もそれを肯定していることから、『白痴』覚書について語る上でなかば定説と化しているものだ。それでは、『白痴』のなかに青年運動の挫折の経験はいかなる仕方を読みこまれ、またムィシキン公爵とハインレはいかなる意味で重ね合わされたのか。わずか4頁余りのごく短い文章にすぎず、小説に対する特に詳細な分析が提示されるわけでもない『白痴』覚書から、如上の定説的解釈の妥当性を検証するのは必ずしも容易ではない。

ショーレムの回想によれば、ベンヤミンは平素、青年運動期の経緯についてほとんど話題にしなかったという⁴⁾。ベンヤミンの個人史に穿たれた二重の空白——青年運動期の「読書目録」の欠落とベンヤミンの沈黙。この二重の空白のうちに、小説『白痴』は浮かび上がる。本稿では以下、ショーレムの証言に由来する『白痴』覚書の定説的解釈を一応の出発点としながら、『白痴』覚書に含まれる潜在的内容を掘り起こし、それを『白痴』のうちに可能なかぎり跡づけること、そして『白痴』との対決が、ベンヤミンをして〈批評〉^{クリティーク}のもつ裁断する力^{クリネイン}に目覚めさせる契機となったことを論じてみたい。

2

『白痴』覚書の成立事情については、それが1917年の夏に書かれたこと——これもまたもっぱらショーレムの証言に依拠している——のほかにはほとんど何も知られていない。おそらくそれは当初、特に公表する予定のない、表題すらも付されていない文書として、青年期ベンヤミンの私的事

情を知る、ごく限られた友人に回覧させるつもりで書かれたのだろう、ということがわずかに推測できるばかりだ⁵⁾。1917年6月、兵役免除を受けたベンヤミンは、新婚の妻ドーラを連れてドイツを脱出、戦争の喧騒を離れ、中立国スイスへ逃れた。はたして、スイス逃避行の途上、すでにロマン主義研究に着手していたベンヤミンを、小説『白痴』へと向かわせたものは何だったのか。なぜ『白痴』覚書は書かれねばならなかったのか。ベンヤミンの個人史における『白痴』覚書の意義を考える上で、間接的ながら重要な手がかりを与えてくれるのが、同覚書の前後の時期に友人たちに書き送られたいくつかの手紙である。

まずはショーレムの回想を聞こう。「1917年11月、ベンヤミンは、夏に書かれたドストエフスキー『白痴』についての覚書の写しを送ってきた。その覚書は私を感動させたが、同様に私の返答もまた彼を感動させた。私は彼にこう書いた、『小説の解釈ならびにムイシキン公爵をめぐる解釈の背後に亡くなった友人 [ハインレ] の形姿が見える』と」⁶⁾。このショーレムの「返答」に対して、寄留先のベルンから書き送られたのが次の手紙だ。

君の手紙を受けとってからというもの、僕はしばしば晴れがましい気分を味わっている。あたかも祝祭期に入ったかのようだ。そして僕は君に開示されたものを啓示として讃えずにはいられない⁷⁾。

『白痴』覚書をハインレのオマージュと見るショーレムの解釈（「君に開示されたもの」）は、ベンヤミン本人から「啓示」と讃えられることによって、以後『白痴』覚書解釈上の定説となった。ベンヤミン／ショーレムの友情の本格的な開始を告知するこの手紙とほぼ同時期に書かれた、エルンスト・シェーン宛の手紙にはさらにこうある。

僕はいまようやく約束を果たし、僕の仕事のいくつかを君に送ることができるようになった。もしドストエフスキー『白痴』についての批評に関して、すでに聞き知っているのならなおさらのこと、この『『白痴』覚書の] 写しを僕からの贈り物として受けとってくれたまえ。思うに、この作品そのものが僕らのうちの誰にとっても無限に多くの意味を含んでいるに違いない。このことを自分なりの仕方でも表現できたとすれば幸いだ⁸⁾。

ところで、ひとかたならぬ安堵と満足に浸りつつ、友人に『白痴』覚書を謹呈するに至るまでには、長く暗い「夜」があった。1916年末のヘルベルト・ブルーメンタール宛の手紙に吐露されるのは、それから一年後に書かれた上のシェーン宛の手紙から窺われるものとはこれ以上ないほど著しい対照をなす、重く沈鬱な心境である。

夜のなかをくぐり抜けようとするとき、助けになるのは、橋でも翼でもなく、ただ友の足音だけだということを僕は経験した。僕らは夜の只中にいる。[……] 夜に抗して戦う者は、その最も深い暗闇をも動かし、夜にさえ光をもたらさなければならない。

[……] 数年来、この夜のなかから、ヘルダーリンの光が僕の光明となっている⁹⁾。

ベンヤミンの語る「夜」、そこではしかし、「友の足音」が聞こえることはもはやない。なぜなら、この「夜」は、第一世界大戦勃発／ドイツ帝国参戦の報と符節を合わせるかのごとく、1914年8月8日に自殺した「友」ハインレの訃報とともに始まったからだ。ハインレの死は、ヴィネケン・サークルにおける青年運動の挫折を残酷に象徴するものであり、そし

てベンヤミン個人にとってはまた、「途方もない速さで僕をすべての人びとから切り離し、結婚のことを除けば、僕にとって最も近い人間関係にも影を残すことになったもの」¹⁰⁾である。スイス逃避行は、戦時の喧騒からの逃避であると同時に、「友の足音」も聞こえぬまま、ますます暗さを増してゆく「夜」からの逃避でもあったとってよいだろう。しかしながら、無二の「友」の死を起源とする「夜」から、にわかには逃れることなどできるはずもない。「夜」を終わらせるために「夜に抗して戦う」こと。『白痴』覚書は、ベンヤミンにおける「夜」との戦いの記録としてこそ読まれるべきものである。

1917年7月30日付シェーン宛の手紙は、日付と内容の双方から見て、『白痴』覚書の執筆直前ないし直後に書かれたものと推測できる。

僕らは一週間前から当地 [サン・モリッツ] にいる。長年におよぶ戦いの末に——そう述べるのが僕には許されていよう——僕はこの場所を見つけた。そしてチューリヒにおいて、僕を曖昧なかたちで過去に絡みつけていた最後の陰鬱な関係も失われたのち、この場所に踏み入った。戦争前の2年間は、僕のなかに種子として取りこまれ、それから今日までのあいだに起こった一切は、それを僕の精神のなかで浄化するためにこそあったのだと思いたい。今度会ったら、青年運動——その目に見える部分は、かくも強大な暴力によって、かくも完全に没落したのだが——について話し合おう。過去2年間、僕がそれに接近しようと努めた一切のこと [……] それはすなわち没落であった、そしていま僕はこの地であって、いろいろな意味で救われたように感じている。[……]

誕生日に僕は、美しい古書版のグリューフイウスの作品集を手に入れた。この男の作品は、僕らを今日なお脅かす大いなる危険を象徴す

るものだ。すなわち、生の炎を掻き消すとまではいわぬまでも、それを希望なきままに翳らせる危険を。過ぎ去った年月の精神に宿る思慮深さ、それが僕に光を与えてくれる¹¹⁾。

ハインレの死後、青年運動の顛末について長らく沈黙を守ってきたベンヤミンが、ここでふたたび青年運動を話題にしていることは注目に値する。しかし、「友」の死を書きこまれた青年運動の記憶から逃れるためにこそなされたスイス逃避行の途上で、なぜいまさら青年運動が話題にされたのか。いずれにせよ、たしかなのは、「今度会ったら、青年運動 [……] について話し合おう」と書くベンヤミンは、単に時間的な意味においてではなく、精神的な意味においても、青年運動とそれに参加していた当時の自分から遠く離れたところにいるということだ。「僕を曖昧なかたちで過去に絡みつけていた最後の陰鬱な関係も失われた」とは、直接にはブルメンタールとの訣別¹²⁾を指しているが、「夜」からの逃避を諷め、「夜」との戦いへと転じたベンヤミンにとって、およそ過去との関係の一切は「陰鬱」であり、是が非でも断ち切らねばならぬものであったに違いない。曖昧に温存された過去との関係は、その過去に挫折の経験が書きこまれていればいるほど、「生の炎を掻き消すとまではいわぬまでも、それを希望なきままに翳らせる危険」を孕むものとなる。したがって、過去の忘却ではなく、過去の「浄化」こそが問題となるのだ。『白痴』を読むこと／『白痴』覚書を書くことの本質はいまや明らかだろう。それはすなわち、「夜に抗して戦う者」の現在から、青年運動期の過去を裁断し、それを冷徹な精神による反省に委ねることである。

3

きわめて錯綜した物語構成をもつ小説『白痴』は、ドストエフスキーの

数ある作品のなかでも、ひととき難解な作品のひとつであるといつてよいだろう。ムイシキン、ナスターシャ、ロゴージンの三者による愛憎関係の推移を一応の——とわざわざ断るのは、小説第2部以降、この三者の関係はむしろ物語の背景に退き、ようやく結末近くになって物語の表層に再浮上するからなのだが——主筋としながら、そこにムイシキン、ナスターシャ、アグラーヤの三者による恋愛関係がもうひとつの主筋として交叉し、他方ではまた、物語中に次々と挿入される、それぞれ独立性をもった多くの登場人物たちによる副次的エピソードが、二重化された主筋の進行を分断し、遅延させる。こうした物語全体の構成は、にわかにその概要を把握することすら容易ではなく、作品の再読を読者に要求せずにはおかない。ところで、前節に引いた1917年末のシェーン宛の手紙には、『白痴』が青年運動に携わった者たちすべてにとって「無限に多くの意味を含んでいる」作品であると述べられていた。『白痴』覚書の簡素な記述から、この「無限に多くの意味」を推し量るには、この先まだ考察を積み重ねなければならないが、ひとまずは、ベンヤミンが『白痴』をいかなる物語として読んだのか／ベンヤミンにとっての『白痴』の主題は何か、という点を明らかにしておく必要がある。『白痴』覚書冒頭の一節を見てみよう。

ドストエフスキーにとって世界の運命は、民衆の運命を媒質にしてあらわれる。これが偉大なナショナリストに典型的なものの見方であり、その見方によれば、人間性は民衆性を媒質としてのみ、自己を展開することができるのである。(Ⅱ / 1, 237)

おもむろに「運命 (Schicksal)」を語る一節とともに書き起こされた『白痴』覚書は、やがて末尾にさしかかったところで「救済 (Heil)」(Ⅱ / 1, 240) としての〈子ども〉という主題に言及したのち、はたして「希望

(Hoffnung)」を語る一節によって締め括られることになる。

人間の生が自己の没落へ至るまで生あるものにかかわっていくこと、いつの日か、そこから巨大な力が人間的なものにふさわしい偉大さで噴き出てくるであろう火口のはかり知れない深淵、それこそが民衆の希望である。(Ⅱ /1, 240 f.)

作品の細部に至る綿密な分析によって肉付けされていない、いまだ剥き出しの図式でしかないとはいえ、のちに『親和力』論(1921/1922年)で全面的に展開されることになる、ベンヤミンに特有のユダヤ神学的世界観に裏打ちされた批評の図式(〈^{テーゼ}命題としての神話的なもの:運命〉／〈^{アンチテーゼ}対立命題としての神的なもの:救済¹³⁾〉／〈^{ジンテーゼ}総合命題としての希望〉)が、すでに『白痴』覚書に透かし見えることは興味深い。だが、この点について、ここでさらに考察を進めることは差し控えたい。本稿の議論にとってより重要なのは、民衆性を媒質にしてあらわれるとされる〈^{フマニテート}人間性〉の理念である。ただし、上に引いた『白痴』覚書の冒頭ならびに末尾の一節は、ことさらベンヤミンの独創というわけではなく、つまるところドストエフキーの「土壤主義」、すなわち、未来へ向けたロシアの再生は、安直な西欧崇拜を捨てた知識階層と、無教養だが生き生きとした生命力に満ち溢れた民衆(「土壤」との合体をとおして形成される、というスラヴ主義的政治思想のパラフレーズにすぎない¹⁴⁾)。したがって、それを性急に『白痴』覚書の結論と捉えてしまうならば、ベンヤミンの個人史における同覚書の意義——『白痴』を媒質にして青年運動の経験を反省的に読むこと——は見えなくなってしまう。『白痴』覚書のベンヤミンが『白痴』を〈人間性〉の再生の物語として読んでいることは間違いない。では、〈人間性〉の理念と青年運動の経験とは、いったいいかなる仕方に関連づけられるのか。

ハインレへのオマージュをこめて、ムイシキンの生の不滅性を論じたのち、ついにベンヤミンは、自身が『白痴』へ寄せる偏愛の所以を直截に吐露するに至る。

ところで、不滅性のうちにある生をあらわす純粋な言葉とは、すなわち青春である。この書物にこめられたドストエフスキーの大いなる嘆き、それは青春の運動の挫折にほかならない。青春の生は不滅だ。しかし、それはみずからに固有の光のなかで失われてしまう。これがつまり「白痴」なのである。(Ⅱ / 1, 240)

ここにいわれる「青春の運動 (Bewegung der Jugend)」が「青年運動 (Jugendbewegung)」を示唆していることは明らかだろう。〈人間性〉の再生をめざした「青春の運動／青年運動」、それがすなわち、ベンヤミンが読む『白痴』の「全的運動」(Ebd.)にほかならない。この「運動」は、「民衆的なものの燃え立つような原初的气体から、過渡的に純粋な人間性が生みだされる」(Ⅱ / 1, 237) という言葉にあるとおり、〈人間性〉の再生へとつながる道程の「過渡」期において起こる「運動」であり、同時にまた、まさにその「過渡」期において「挫折」し、「みずからに固有の光のなかで失われてしまう」ことを運命づけられた「運動」である。だが、なぜ「青春の運動／青年運動」は、〈人間性〉の再生の道程を最後までたどりきることなく、その途上で「挫折」しなければならないのか。

ドストエフスキーの優れた読み手であった森有正は、『白痴』について次のように述べている。「人間と人間との真の関係、人間が真の人間になることとはなにを意味するか、そこに『白痴』の中心が求められなければならぬ。故にこの小説は、全体の人間的關係そのものが主人公である、とも言うことができるのである。だからムイシユキン、ナスターシャ、アグ

ラーヤ、イッポリート、ラゴージン等は、みな同じ重みをもって現れるのである。そして問題は、人間存在のその存在性における他者との関係の深まり方にあるのであって、ムイシュキンはその全体の錯綜のひとつの中心点として、すべてがそこに象徴的に集約されてくるのである¹⁵⁾。『白痴』の登場人物たち、とりわけ青年たちは、それぞれ独立した存在であるにもかかわらず、彼らがみずからの意志とは無関係にそのなかにとりこまれるところとなった人間関係によって、ときに自然的個体としての自己の生来の性格を歪められるほどに、その存在を深く規定されている。たとえばナスターシャは、いまだ幼年時代のトラウマ的体験に呪縛され、人知れず苦悩を抱えながら、周囲の人びとには傲慢かつ奇矯な振る舞いをこれ見よがしに誇示し、自己の没落へ向けて闇雲に突き進む。しかし、ナスターシャの自暴自棄な墮落は、彼女の自然的本質に由来するのではない。ふたたび森を参照しよう。「かの女がこのように方向を決定されていたということそのことは、けっして自然的に、かの女の生来の体質とか性格とかによるものではなく、トーツキイとの交渉そのものにおいて確定されたということである¹⁶⁾。換言すれば、「かの女の苦悩は、かの女のトーツキイとの関係そのもののなかに存するのであって、自然的個体としてのかの女それ自体に存するのではない¹⁷⁾」。

『白痴』の青年たちは、偶然の邂逅を契機に切り結ばれた関係のなかで苦悩する。なぜなら、彼らの存在を規定する関係は、彼ら自身の欺瞞と韜晦に塗りこめられているからだ。引きつづき、ナスターシャを例にとりて考えてみよう。小説第1部を締め括る夜会の場面は『白痴』のクライマックスのひとつである。ナスターシャの結婚をめぐるペテルブルク社交界の陰謀が首尾よく成就する運びとなっていた夜会は、招かれざる客ムイシキンの闖入によってにわかにも色めき立つ。陰謀の立役者であるトーツキー、エバンチン将軍、ガヴリーラの思惑を尻目に、思いがけず莫大な遺産を相

続することが判明したムイシキンは、突如ナスターシャに求婚する。世間の評判はいざ知らず、ナスターシャにとってムイシキン公爵との結婚は、将来の裕福な生活を保証するばかりでなく、^{アナスタシア}〈再生〉の名をもつ女にふさわしく、情夫トーツキーによって幼年時代から毀損されつづけてきた彼女の人間性の再生を約束するはずのものであった。ところが、長らくその到来を夢想してきた幸福が現実^に到来しようとしたまさにそのとき、あろうことかナスターシャは、狂気の発作に見舞われ、その幸福をみずから放擲してしまう。

後に全員が証言したところによると、まさにこの瞬間からナスターシャ・フィリップヴナが狂ったのである。彼女も腰を下ろしたままで、しばらくの間奇妙な、びっくりしたような目つきで皆をじろじろ見回していたが、それはまるで何がどうなっているのか分からなくて、懸命に理解しようとしているかのようなようだった。それから彼女は不意に公爵のほうを向くと、威嚇するように眉をひそめ、まじまじとその顔を見つめた。だがそれも一瞬のことだった。おそらくふと、こんなことは全部冗談ごと、お笑いごとじゃないかという気がしたのだが、しかし公爵の顔つきはそんな彼女の思いこみをただちに払拭するものだったのだ。彼女は考えこみ、それからまたにやりと笑ったが、何を笑ったのかははっきり意識してはいないようだった……¹⁸⁾。

幸福に憧れ、また幸福に怯えるナスターシャは、ムイシキンの求婚を拒絶し、ロゴージンと共に邸宅をあとにする。なぜ彼女はムイシキンを捨て、ロゴージンの元に走ったのか。通常の心理学的分析にその答えを求めることはできない。ナスターシャの狂気は、ムイシキンとの結婚という幸福を拒絶することで、トーツキーら陰謀家の非人間的本性を暴露しようと

するデモーニッシュな欲望の発動である。ただし、この欲望の主体は、自然的個体としてのナスターシャ本人ではない。それは、みずからがそのなかにとりこまれたところの関係が彼女に強い欲望なのだ。そして、ひとりナスターシャのみならず、『白痴』の青年たちはみな、そうした理不尽な関係にがんじがらめにされ、自己の没落へ向けてしだいに消耗してゆく。〈人間性〉の再生をめざす「青春の運動／青年運動」が、その再生の「過渡」期において無惨なかたちで挫折してしまうのはそのためだ。青年たちをして〈人間性〉の再生を志向させる力の根源であるがゆえに、その衰弱が青年たちの「運動」を挫折させずにはおかないもの。それは青年たちの内なる〈子ども〉である。

4

『白痴』の青年たちは、おしなべて幸福な幼年時代を知らない。幼くして両親と死別したムイシキンは、家族の記憶はもとより、パヴリーシチェフ氏なる人物に養子として引きとられ、世話を受けたということのほかには、自分の幼年時代全般について、ごくおぼろげな記憶しかもちあわせていない（ただし、小説の読者には、当時の事情を知るイワン・ベトロヴィチの回想をとおして、養育のために預けられた老嬢のもとで、幼いムイシキンがときとして虐待に近い扱いを受けていたことが知らされる）。貴族出身ながら、ムイシキン同様、早くに両親を亡くしたナスターシャは、裕福なトーツキーに引きとられたものの、その類稀なる美貌が災いして、やがて好色な富豪の若き妾として「愉悦村」での恥辱に満ちた生活を余儀なくされる。人並み外れた吝嗇ぶりで知られた大商人を父にもつロゴージンは、キリスト教異端派セクト「去勢派」の教義に傾倒する父の専制的指導のもと、父同様の禁欲的な生活を強いられ（ちなみに、ロゴージンの名「パルフォン」は「童貞」の意である）、友もなく、娯楽も知らず、ただひたすら下僕のようにこき使

われてきた。そのほか、イッポリート、ブルドフスキーらも、事情はそれぞれ異なるにせよ、その家庭環境から推して、幸福な幼年時代を通過することなく青年に至った者とみなしてよいだろう。『白痴』の青年たちのなかでは唯一例外的に、幼年時代の幸福に恵まれたかのように見えるアグラヤもまた、裕福な家庭における物質的充足とは裏原に、家族一同による過剰な庇護に圧迫され、個人としての自由を奪われている。

こうした幸福な幼年時代の欠落と対をなすのが、〈父〉の不在である。『白痴』の青年たちには、社会における自己の位置を見定め、将来の幸福な生活を追求していく上で、模範となり、教導者となるような〈父〉が存在しない。社交にかまけ家庭を顧みることのない、日和見主義で凡庸なエパンチン将軍。表向き上流紳士の顔をかぶりながら、ナスターシャの運命を淫靡に弄んだトーツキー。酒癖が悪く、誰彼かまわずでたらめな話を語り聞かせては悦に入るイーヴォルギン将軍。ゴシップの種をいち早く嗅ぎつけ、事態の紛糾を楽しむかのように立ち回る生来の道化役者レーベジェフ。このような〈父〉の世代の姿は、青年たちにとって軽蔑の対象でこそあれ、尊敬の対象ではありえない。「だいたいここには誠実な人間がおそろしく少なく、尊敬できる相手など皆無です」¹⁹⁾というコーリヤの嘆きも無理からぬところである。青年運動期の師父ヴィネケンとの訣別²⁰⁾をすでに通過してきたベンヤミンが、『白痴』覚書のなかで、上に列挙した〈父〉の世代に属する登場人物たちについてまったく言及していないのは、この点できわめて暗示的といえよう。『白痴』に描きだされるのは、〈父〉からの精神的遺産を受け継ぐことのなかった青年たちによる悲喜劇的な試行錯誤の迷走である。

幼年時代の幸福を知らず、模範となる〈父〉の教導もないまま、世界のなかに無防備に放置された青年を襲うのは、「世界の饗宴」からつまはじきにされた「死産児」の感覚であった。結核に蝕まれ、死期の迫ったイッ

ポリートは、「わが不可欠なる弁明」と題された遺書でこう語る。「たとえば日の光を浴びて周囲をぶんぶん飛び回っているこの小さなハエ、こんな奴でさえ世をあげての饗宴と合唱の参加者として、自分の持ち場をわきまえ、それを愛し、幸せを感じているのに、ぼく一人だけが死産児であり、[……]」²¹⁾。このイッポリートの言葉に触発されたムイシキンが回想するのは、祖国ロシアを遠く離れ、スイスで療養生活を送っていた当時の孤独な「死産児」の姿である。

ある晴れた、日差しの明るい日のこと、山岳地帯に入っていった彼は、なにか重苦しい、しかしいっこうに形の定まらない思いに駆られながら、長いこと歩き回った。前方にはまばゆい空、下方には湖、周囲をぐるりと、終わりも果てしもない、明るい無窮の地平線が取り巻いている。彼はじっとそれらを見つめたまま、身も世もなく苦しんでいた。いま彼には、自分がその明るい、無窮の青い空間に手を差し伸べながら、泣いていたときのことが思い起こされたのだった。彼を苦しめたのは、自分がそのすべてに対してまったくのよそ者であるという事実だった。はるか昔から、子供の頃からずっと心を惹かれながら、どうしても仲間に入ることのできない、この果てしない饗宴、終わることを知らぬ日々の大いなる祝祭は、いったい何だろう？ [……] すべてのものに己の道があり、すべてのものが己の道をわきまえ、歌とともに去り、歌とともに来る。ひとり彼のみが、人のことも音のことも、何ひとつ知らず、何ひとつ分からず、すべてに無縁な死産児なのだ。おお、もちろん当時の彼にはこうした言葉で語り、自分の問いを発することはできず、ひたすら耳も聞こえず口もきけぬままに苦しんでいたのだった²²⁾。

ベンヤミンは、ムイシキンの形姿を包む「この上なく完全な孤独」(Ⅱ /1, 238)を指摘していたが、その「孤独」は、ひとりムイシキンのみならず、ロゴージン、ナスターシャ、イッポリートら、「死産児」として世界に漂流することを余儀なくされた青年たちが共有するものである。ただし、「死産児」の「孤独」に苛まれる青年たちの内部に、「無限の癒しの力」(Ⅱ /1, 240)を秘めた内なる〈子ども〉が生きていることを忘れるわけにはいかない。『白痴』の幾人かの登場人物たちのあいだにときとして作用する奇妙な親和力は、いわば互いの内なる〈子ども〉の共鳴とでも呼ぶべき性質のものだ。「子供たちは心を癒してくれるもの」²³⁾と語るムイシキンは、彼とコーリヤ、ヴェーラ、アグラヤ、エリザヴェータ夫人、スイス療養中に出会った薄幸の娘マリーとの関係からも明らかなように、内なる〈子ども〉の共鳴の中心をなす存在といつてよい(ちなみにベンヤミンは、ムイシキンとコーリヤを「子どもの本質において最も純粋な存在」(Ebd.)とみなしている)。では、ロゴージンやナスターシャはどうか。およそ一切の他者に対して冷たく閉ざされたその心の内奥にも、はたして〈子ども〉はたしかに生きている。すっかり毫礫し、「精神は完全に子供にかえていた」²⁴⁾老母にムイシキンを引き合わせ、「実の息子にしてきたように、この人を祝福してやってくれ」²⁵⁾と頼む際のロゴージンの真摯な立ち振る舞い、あるいはまた、傲岸不遜を常とするナスターシャがロゴージンの母に対して見せたという「実の娘みたいに親身な態度」²⁶⁾は、内なる〈子ども〉の共鳴なくしては考えられない。そもそもムイシキン、ナスターシャ、ロゴージンの破局的な三角関係は、ほかでもない三者の内なる〈子ども〉の共鳴によってこそ、呪縛的なまでに固く切り結ばれたのではなかったろうか。

「ただ子どもの精神においてのみ、人間の生は、民衆の生から発しつつ高貴な発展を遂げる」(Ebd.)。「青春の運動／青年運動」とは、内なる

〈子ども〉に宿る「無限の癒しの力」を、より普遍的な〈人間性〉へと昇華することではないだろうか。そして「毀損された幼年時代こそが青春の苦しみである」(Ebd.) のだとすれば、それはとりもなおさず、〈人間性〉の再生をもって毀損された幼年時代と和解し、それを克服することにほかならない。このような意味で、「青春の運動／青年運動」とはまさに、青年の生に不可避的なひとつの〈^{パサージュ}通過〉の経験——「通過儀礼 (les rites de passage)」(ファン・ヘネップ) ——であったのだ。しかし、『白痴』の青年たちは、内なる〈子ども〉の自然な発露を妨げ、自他の内なる〈子ども〉を互いに傷つけあうことを強いるような、欺瞞と韜晦に塗りこめられた関係に呪縛され、その関係のなかで自滅していく。彼らにあって〈通過〉の経験は、はたして破局的経験となる。「この書物の全的運動は、巨大な噴火口の陥没に似ている。自然と幼年時代が欠けているため、人間性が獲得されるのは、ただ破局的な自滅のなかでしかない」(Ebd.)。

かの青年たちの必然的な破局をあらかじめ見越していた人物にエリザヴェータ夫人がいる。『白痴』の物語のなかでエリザヴェータ夫人は、コーリヤ、ヴェーラとならんで、自然な感情生活を保持している数少ない登場人物である。エリザヴェータ夫人は、初対面のムイシキンから「いいところも悪いところもひっくりかえり、どこからどこまでまるっきり子供²⁷⁾」と評されるが、他者の内なる〈子ども〉の存在を感知することに關して、ムイシキンと同等の鋭敏な感受性を具えている彼女は、自他の内なる〈子ども〉が蒙る暴力をいち早く感知する。折に触れて爆発する彼女の癩癩は、他者の内なる〈子ども〉が傷つけられていく様を眺める、彼女の内なる〈子ども〉が発する悲鳴である。

ドストエフスキーの登場人物たちの発話は、子どもの不完全な言語であるがゆえに、いわば崩壊してしまい、幼年時代への過剰な憧憬——

現代風に言えば、ヒステリー——のなかで、とりわけこの小説の女たち、リザヴェータ・プロコーフィエヴナ [エリザヴェータ夫人]、アグラヤー、ナスターシャ・フィリップオヴナは消耗してゆく。(Ebd.)

小説中盤、怒りにまかせたエリザヴェータ夫人の内なる〈子ども〉が悲鳴にも似た「不完全な言語」で発した罵声の言葉——それは直接には、イッポリートらの軽佻浮薄で独善的な言行に対して向けられたものであったが——は、内なる〈子ども〉のもつ「無限の癒しの力」を抑圧し、〈人間性〉の創造を阻害する理不尽な関係に絡めとられたまま、この関係を打破すべく行動することを先延ばしにする青年たちすべてにとって、紛れもない予言となった。「そうさ、あんたたちは虚栄と慢心にとことん蝕まれているから、しまいにお互い共食いするしかない——そう私から予言しておくわ」²⁸⁾。

それにしても、なぜ『白痴』の青年たちは、理不尽な関係のなかでなすすべもなく自滅し、あるいは自己の破滅によってしかその関係に終止符を打つことができなかつたのか。その理由を〈批評〉の欠如と呼んでみよう。『白痴』の登場人物には、一種の批評家の役割を与えられた者が存在する。楽園にこそふさわしいムイシキンのほとんど超越的といってよい無際限の愛が、楽園ならざる地上の世界ではときとして独善として現象し、人びとにとって躓きの石ともなりうることを警告するS公爵（「楽園というものは難しいものですよ、公爵。あなたの美しい心に感じられるのよりは、もっとずっと難しいものです」²⁹⁾）、またムイシキン、ナスターシャ、アグラヤーの三角関係を端的に「嘘」と断じ（「そもそも発端から [……] あなた方の関係は嘘で始まったのです。そして嘘で始まったものは、嘘に終わる定めなのです」³⁰⁾）、二人の女に対するムイシキンの愛を「肉体のない精神」³¹⁾が描きだした夢にすぎなかつたのだ、と指摘するラドームスキーがそれである。

S公爵，ラドームスキーの冷静な傍観者の立場からの〈批評〉と比べ，二重の三角関係の当事者であるアグラーヤが，ナスターシャの倒錯した自己愛に突きつけた〈批評〉はより辛辣なものだ。

あなたはこの人〔ムィシキン〕を，こんなにも純な人を，愛することができなかった。それどころか，もしかしたら心の中でこの人のことを馬鹿にして，あざ笑っていたのです。なぜならあなたという人は，ただひたすらご自分の恥辱だけを，そしてご自分が辱められた，傷つけられたという絶え間ない思いだけを，愛することしかできない人だからです³²⁾。

二重の三角関係の一方は，こうしてアグラーヤの〈批評〉によって一応の終止符が打たれたと考えてもよい。しかし，もう一方のより錯綜した三角関係に終止符を打つためには，なおいっそう鋭利な〈批評〉の暴力を呼び出す必要があった。すなわち，ナスターシャの心臓を一撃のもとに刺し貫いたロゴージンのナイフである。

5

『白痴』覚書にはひとつの謎がある。それは『白痴』覚書がロゴージンについてまったく言及していないことである。

『白痴』の物語は，ベテルブルク＝ワルシャワ鉄道の三等車に偶然乗り合わせた，青ざめた顔をした二人の孤独者の邂逅によってはじまった。そして物語を閉じるのもまた，ひとりの女の屍の前で，まるで幼子のように寄り添う，同じ二人の孤独者の無惨に破滅した姿である。

すでに長い時間がたってからドアが開いて人々が踏みこんできた時，

彼らが見た殺人者は完全に意識を失い、熱に浮かされた状態にあった。公爵はじっとその傍らの寝床の上に座りこみ、病人が叫び声やうわごとを発するたびに、急いで、まるであやしなだめるかのように、震える手をそっとその髪や頬に這わせるのだった。しかし彼はもはや何を質問されているのかもまったく分からず、入ってきて自分を取り巻いている人々が誰なのかも識別できなかった³³⁾。

「白痴」ムイシキンと殺人者ロゴージン。小説『白痴』を語る上で、この二人の孤独者を切り離して考えるわけにはいかない。なるほど、ハインレへのオマージュとされる『白痴』覚書において、ハインレの像を読みこまれたムイシキンが議論の中心に置かれるのは当然であろう。しかし、小説に登場する数多くの脇役的人物はいざ知らず、ムイシキンと対極的存在でありながら、同時に精神的双生児でもあるロゴージンについて、なぜベンヤミンは何も言及しなかったのだろうか。ムイシキンについて語りながら、理由なくロゴージンの存在を看過したとは到底考えられない。いかに大胆な見方であれ、考えられる理由はただひとつである。ムイシキン／ハインレへのオマージュ『白痴』覚書は、まさにロゴージン／ベンヤミンによって書かれたのだ。

次に引く『白痴』覚書の一節において、小説『白痴』を語るベンヤミンは、みずからの青年運動期の過去を吐露するベンヤミンとほとんど一体化している。

小説末尾の短い報告は、すべての人びとに、彼らが参加したこの生[ムイシキンに象徴される青春の生]によって、永遠に消えることのない刻印を押す。どのようにしてそうなるのか、それを彼らは知らないのではあるが。(Ebd.)

ベンヤミンもまた、ムィシキン／ハインレの生に象徴される「青春の運動／青年運動」に参加した「すべての人びと」のうちのひとりであった。だが、まさに上の言葉によってベンヤミンは、そうした「すべての人びと」から『白痴』覚書を書く現在の自分を切り離しつつ、挫折した「青春の運動／青年運動」に、そして無自覚なまま「永遠に消えることのない刻印」を押された「すべての人びと」（それを彼らは知らない）に対して別れを告げるのだ。ちょうどロゴージンが、かのナイフでナスターシャを殺害し、破局的な三角関係に終止符を打つとともに、『白痴』の物語に登場した「すべての人びと」との関係をも断ち切り、いち早く物語の圏外へ姿を消していくように。「小説末尾の短い報告」が最初に触れるのは、はたして事件後のロゴージンについてである。

ロゴージンは二ヶ月間脳の炎症を持ちこたえ、回復した後では、取調べと裁判を持ちこたえた。彼はすべての事柄に関してまっすぐで正確な、十分に納得のいく供述を行い、おかげで公爵は、最初から裁判の対象外とされていた。ロゴージンは審理の間は寡黙だった。巧妙で雄弁な弁護士は、犯行は事件のはるか前に悲嘆のあまり被告の身に生じた脳炎の結果であると、明快かつ論理的に証明してみせたが、ロゴージンはそれと矛盾したことは言わなかった。ただし彼はそうした見解を補強するようなことを何ひとつ自分から付け加えようとはせず、相変わらず事件のごく細かな状況に至るまですべて、はっきりと正確に確かめ、思い起こしてみせるのだった。情状酌量を加味した結果、彼には十五年のシベリア懲役流刑が宣告されたが、彼はその宣告を厳しい面持ちでむっつりと、「考え深そうに」聞き終えた³⁴⁾。

ベンヤミンにおける『白痴』覚書は、ロゴージンにおけるナイフであ

る。それらとともに、挫折した青年期の生と訣別し、それを超えてなおも生きながらえてゆくために、とはすなわち、過酷な〈通過〉の経験のために不可欠な、暴力的に裁断する力をもっていた。みずからの過去の顛末についてロゴージン／ベンヤミンが守る「寡黙」は、過去の忘却ではなく、それを冷徹な精神による反省のなかで「ごく細かな状況に至るまですべて、はっきりと正確に確かめ、思い起こ」すことこそを志向している。一個の文芸批評として見れば、後年の『親和力』論等の充実には到底およばない『白痴』覚書は、ベンヤミンの実存の次元において、まぎれもなく〈批評〉であった。

「僕は人生の新たな時期に歩み入った」³⁵⁾——1917年12月3日付ショーレム宛の手紙にそう書き記したベンヤミンの念頭では、小説『白痴』との対決のなかに書きこまれたみずからの〈通過〉の経験が想起されていただろう。だが、『白痴』覚書だけをもってして、件の「夜」が終わったわけではない。裁断する〈批評〉の力を呼びだすべを知ったいま、ベンヤミンにおける「夜」との戦いはあらためて本格的に開始されたのである。「夜に抗して戦う者」にはこの先まだ幾多の〈通過〉の経験が課せられ、やがて真に破局的な〈通過〉——1933年の亡命——が到来したことを後世は知っている。しかしながら、後世はまた、まさに〈通過〉の危機においてこそ、そのつど〈批評〉が「光」を見いだしてきたことを知っている。「夜」のなかから「光」を切りだす〈批評〉。それ自体ひとつの〈通過〉の危機であったスイス時代にあって、〈批評〉の概念を徹底的に追究した学位請求論文『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』（1919年）が、その末尾で「冷徹な光（das nüchterne Licht）」（I /1, 119）を語るのゆえなきことではない。

* 本稿は、2010年度特定課題研究費「ヴァルター・ベンヤミンと世紀転換期ドイ

ツ青年運動」の研究成果の一部である。

注

- 1) Brief Benjamins an Herbert Blumenthal [Ende 1916]; in : Benjamin, Walter : *Gesammelte Briefe* [Abk. : GB]. 6 Bde. Hrsg. v. Christoph Götde u. Henri Lonitz. Ffm. : Suhrkamp 1995 ff., Bd. I , S. 348.
- 2) Benjamin, Walter : *Gesammelte Schriften*. 7 Bde. Unter Mitw. v. Theodor W. Adorno u. Gershom Scholem, hrsg. v. Rolf Tiedemann u. Hermann Schwepenhäuser. Ffm. : Suhrkamp 1991, Bd. VII / 1, S. 437-476. 以下, 同書からの引用は, 巻数と頁数を本文中に挙げて該当箇所を指示する。
- 3) Vgl. Lindner, Burkhardt (Hrsg.) : *Benjamin-Handbuch. Leben - Werk - Wirkung*. Stuttgart ; Weimar : J. B. Metzler 2006, S. 343 ff.
- 4) Scholem, Gershom : *Walter Benjamin - die Geschichte einer Freundschaft*. 3. Aufl. Ffm. : Suhrkamp 1990, S. 27.
- 5) 『白痴』覚書に「ドストエフスキーの『白痴』」の表題が最終的に付けられたのは, リヒャルト・ヴァイスバツハ発行の雑誌『アルゴナウテン』への掲載発表が確定した1920年のことである。Vgl. Brief Benjamins an Richard Weißbach vom 6. 8. 1920 ; in : GB, Bd. II, S. 98.
- 6) Scholem, *die Geschichte einer Freundschaft*, a. a. O., S. 66.
- 7) Brief Benjamins an Gershom Scholem vom 3. 12. 1917 ; in : GB, Bd. I , S. 398.
- 8) Brief Benjamins an Ernst Schoen [Ende 1917]; in : GB, Bd. I , S. 414.
- 9) Brief Benjamins an Blumenthal [Ende 1916], a. a. O., S. 348.
- 10) Brief Benjamins an Scholem vom 3. 12. 1917, a. a. O., S. 398.
- 11) Brief Benjamins an Schoen vom 30. 7. 1917 ; in : GB, Bd. I , S. 373 f.
- 12) Vgl. Brief Benjamins an Blumenthal vom 10. 7. 1917 ; in : GB, Bd. I , S. 368.
- 13) ただし, 『親和力』論における批評の図式において「救済」をあらわす語は“Heil”ではなく“Erlösung”である。
- 14) ショーレムの回想によれば, マルクス主義に接近する以前のベンヤミンは, ドストエフスキーの政治論を「近代における最も重要な政治的文献」と呼んで高く評価していたという。Vgl. Scholem, *die Geschichte einer Freundschaft*, a. a. O., S. 104.
- 15) 森有正『ドストエフスキー覚書』筑摩書房, 2012年, 357頁。
- 16) 同上, 356頁。

- 17) 同上, 359頁。
- 18) ドストエフスキー 『白痴』(全3巻), 望月哲男訳, 河出書房新社, 2010年, 第1巻, 356-357頁。
- 19) 同上, 285頁。
- 20) Vgl. Brief Benjamins an Gustav Wyneken vom 9. 3. 1915 ; in : *GB*, Bd. I, S. 263 f.
- 21) 『白痴』第2巻, 498頁。
- 22) 同上, 520-521頁。
- 23) 『白痴』第1巻, 141頁。
- 24) 『白痴』第2巻, 97頁。
- 25) 同上, 98頁。
- 26) 同上, 80頁。
- 27) 『白痴』第1巻, 160頁。
- 28) 『白痴』第2巻, 227-228頁。
- 29) 同上, 341頁。
- 30) 『白痴』第3巻, 336頁。
- 31) 同上, 346頁。
- 32) 同上, 311頁。
- 33) 同上, 404頁。
- 34) 同上, 405-406頁。
- 35) Brief Benjamins an Scholem vom 3. 12. 1917, a. a. O., S. 398.